



海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ⑧)

高島 敬明

ノボロシースク市の於ける「LX-プロジェクト 機器据付」は、既述のとおり日本、フランス、ソ連の参加国の共同事業ですが、中心的な役割はもちろん日本です。フランスは、下部工事、橋脚工事を担当し、ソ連は主として機器の運搬と作業員の提供です。今回はまず、フランスの業者について書いていきましょう。

フランスの業者は、“UiE社”でした。同社とは、最初のうちは言葉が通じず会議の時はフランス語⇔英語、英語⇔日本語、と通訳が2～3名必要な時がありなかなか意思疎通できませんでしたが、1～2か月経つうちに同社の監督や作業員ともお茶目にウインクする間柄となりました。彼らは住居兼作業員宿舎として台船を牽引してこの地まで来ているので、食料や物資は豊富のようでした。我々は水一つでも瓶に入れたり2km離れた現場事務所まで帰って飲んでいましたが、彼らを見ていると瓶に入ったビールを木製の箱に入れて現場に持参して飲んでいました。大量にあるものですから瓶の王冠を取って二口三口飲んで海に投げ込むのです。日本人作業員には、「欲しい素振りは絶対に見せるな！ビールに限らず物をもらったら絶対だめだ！」と言ってありました。それでも私を含め、たぶん物欲しそうにしていたんだと思います。

作業員仲間でもソ連の食事はまずくて散々だとすこしオーバーに手振り身振りで話していました。

ある時、寺島さんから「フランスの監督官が高島さんをディナーに招待したいと申し込んでき

ました」と言われるのです。寺島さんに「ありがたい話ですが、人選はどうしたらいいですか？服装は？フランス料理ですかね？」と矢継ぎ早にお聞きしますと、「普通にしていればいいのではないですか。女性通訳のBさん(24～5歳の東京外大を出たばかりの人)を連れて行ったら」と言われました。ともかく事務所中大騒ぎになりました。参加を承諾したBさんからは、「おそらくフランス料理のフルコースですよ。」と言うので、「私はフランス料理は食べたことはありませんし、作法も知りません」と言いますと、「私のする通りにして食べてください。どうせ話せないんだし」と素っ気ない返事。2人ではまずいだろうと他のマネージャーを考えましたが適当な人が見当たらないので、結局当社の班長を連れて行くことになりました。尻込みする班長には、「私のマネをして黙って食べていればいいから」と通訳から言われた言葉をそのまま拝借。

当日は小奇麗な格好をして、工事岸壁から船を訪ねました。中は思ったより広くエアコンも効いていてすごく清潔な感じでした。料理は期待していたフルコースではなく、前菜からスープ、そしてステーキまででしたが、肉とワインは美味しく感激しました。先方の片言の英語と彼女の流暢な英語で意思は通じたようです。彼らは監督2名でしたが、常時人が付いて世話をしていただきました。彼らも街に出ることがあるらしく日本人の評判を教えてくれました。それによりますと、日本人は惜しげもなく金を使う、体が清潔であると評判だそうです。為替の関係と一人20リッターの



フランス「UIE社」の作業員の宿舎兼機材運搬用台船

お湯のお陰かなと思いました。彼らは、フランス人の体臭がいやだと街のソ連人に言われている、と話していました。我々サイドでお礼をしなければ、との話もありましたが、どんどんフランス人も空路帰って行くものですからそのままになってしまいました。

話は、ある現場でフランス人の監督からの忠告の話に移ります。監督は、「Mr. 高島、ソ連人と英国人は泥棒が多いから現場でも注意した方がいい」と何回も言われました。フランス人と英国人はあまり仲が良くないようです。そのころ現場で小さな工具が無くなって困っていました。あまりにも盗難が多いので我々の要望によって海運省から警備員が付くようになりました。寺島さんの話ではそれでも用心した方がいいとのことでした。警備員は決まって女性で、制服の上から腰にピストルを吊っていました。派遣された警備員はいつもニコニコ顔でビヤダル(失礼)のような体形をしていました。彼女の前で腰のベルトがよく落ちないものだ、と日本語で話したりしますが彼女はニコニコといつも機嫌よくしていました。小さな工具はそれでも無くなりました。

ある時、保温工事屋さんがゴムボートに空気を入れて現場に持ってきました。黒海に物を落としてそのまま放っておくわけにもいかないし、作業員が落ちた時の為にも用意されたものです。用意



石灰岩採掘の山が背後に。〈白山肌〉は硬水になる。

した最初の日のことです。寺島さんから、「高島さん、毎日ゴムボートはたただで回収しておきなさい」と言われました。皆は、「10メートル下の海面のゴムボートをですか?」と言い、しばらく回収するしないでもめましたが、結局面倒くさいこともあり置いてきたのです。

翌朝行って皆びっくりです。ゴムボートが無いのです。あちこち探しましたが見つかりませんでした。警備員の女性に聞いても知らないとのことでした。寺島さんは、「だから言ったでしょう。警備員もグルなんですよ!」と言。女性を警備員にする理由は次のことがあるようです。暴言を吐けばセクハラで訴えられ、必ず負けるそうです。こんな話があります。モスクワで日本の商社の幹部の方が酔いつぶれ、閉店の注意に来た女性を手で払ったところ、激しく殴打されたと警察に通報され収監されたそうです。しばらくの間日本大使館でも行方が分からなかったそうです。怖い話です(ゴムボートの話は、寺島さんの著書にも出てきます)。

夏になって、現場も鉄板の上ですから照り返しも強く熱くなってきました。私は、たまらなく喉が渴いたので急いで現場事務所に帰り、アラブの水差しの形のポットにお湯があったので早速紅茶を入れて一気に飲み干しました。

これが不注意でした。この辺りは前にも書き

ましたが、〈白い山肌が連なっている山々〉であり、当然水は硬水です。少々の硬水ではないので、我々は一度完全に沸騰させて軟水にして飲んでいましたが、どうやら中途半端に温めた硬水で作ったお茶を飲んだらしいのです。夕方になってくるとお腹がぐるぐる差し込んで来ました。トイレも一人で占拠する始末。油汗が本当にタラタラと流れます。寺島さんがつきっきりで看病してくれましたが、皆さんは最初は伝染病的な病気ではと気をもんだようです。そのうち水だろうとなり、薬もなくなただただ5日間宿舎に寝ていました。6日目から少し水が飲めるようになり、魚国のコックさんも心配しておかゆを持ってきてくれたり、励ましてくれました。海外勤務の経験のある方はお分かりと思いますが、とにかく病気が一番精神的にもダメージがあり、悪く悪く考え体力的にも参ってしまいます。飲まず食わずで薬もなく、7kgの体重減で何とか生還できました。腹の皮と背中がひつつくのではと思うほど下痢と嘔吐に心身共に疲れ果てました。

仕事が順調でもやはり日本の会社に状況報告をしなければなりません。手紙はいつも開封されたものが届いていたようです。電話ならいいだろうと電話にチャレンジしてみました。受話器を取れば女性の交換手が出るようになっています。片言の英語で日本の番号を言うのですが、要領を得ません。挙句の果てには「極東方面の電波状況が悪く今日は日本に繋がりません」とのこと。何回試してもこんな状況でした。寺島さんの助言があり、やっと日本の交換手が出てやれやれと思っただらザアザアと雑音が入って話が出来なくなってしまいました。

時差の関係で日本の就業時間内に電話できる時間はわずかしかなかった。困っているとサブマネからあの電話を使ったらいいよ、と離れたところの電話を示されました。掛けてみると交換手も自然でスムーズに掛けることが出来ました。家族にも掛けましたが案外元気な声が聞けたので安心し、病気のモヤモヤも吹き飛び、やる気が出てきました。

(続く)